

9月15日(木) 14:00~15:00 第23会場 リーガロイヤルホテル T3F 光琳3

全般的なケア(14) [座長] 木戸 日出喜(介護老人保健施設サンセリテ)

第1群: 102 通所リハビリ

第2群: 203 一般的検討(意義・必要性・変化・効果・比較)

第3群: A3303 全般的なケア ケアの質の向上

通所リハ利用者及び家族の生活における興味関心調査

ニーズ把握表を用いての分析

介護老人保健施設 プライムケア 桃花林

小野 愛

通所リハ利用者と家族介護者に、ニーズ把握表を用いて分析を行った結果、利用者が自律するうえでの課題が明らかになった。そして、どんな生活行為に興味・関心があるのか把握できたため報告する。

1 はじめに

これまでの介護予防の手法は、身体機能を改善することを目的とした機能回復訓練に偏りがちであり、介護予防で得られた活動的な状態をバランス良く維持する為の活動や社会参加を促す取り組み(多様な場の創出)が必ずしも十分ではなかったという課題がある。

このような現状を踏まえ、厚生労働省はこれからの介護予防は機能回復訓練を通じた高齢者本人へのアプローチだけではなく、生活環境の調整や、生きがい・役割をもって生活できるような居場所・出番のある地域づくりなど、高齢者本人を取り巻く活動や参加へのアプローチが重要であることを示した。

このことから、当通所リハビリテーション(以後、通所リハと記す)利用者が、どのような生活行為に興味・関心があるのか、さらに、家族介護者からの思いとして、利用者本人に対し、してほしい・してほしくないと感じている生活行為はどんなことかを調査し明らかにしたので、結果を報告する。

2 方法

1)対象者

通所リハを利用している要支援者17名と家族介護者16名(独居者1名を除く)である。

2)データ収集方法

調査用紙は、日本作業療法士協会監修の生活行為向上マネジメントより一部抜粋した「興味・関心チェックシート」を使用した。

興味・関心チェックシートはICFに基づき、ADL7項目、IADL(家事全般・乗り物に乗る行為)7項目、趣味・地域・社会参加活動32項目、計46項目の生活行為が記載されている。

利用者に対し、通所利用日に個別で行った。質問内容は、していること、してみたいこと、興味があることの3項目で聞き取りを行った。

家族に対し、興味・関心チェックシートを一部改変し連絡簿を通して、調査用紙と研究依頼書を同封し、記入後、回収をおこなった。

3)調査期間

・家族: H27年10月19日~11月2日

・利用者：H27年10月19日～11月31日

4)倫理的配慮

調査実施にあたっては、研究の目的、内容、方法を文書及び口頭にて説明し協力をしなくても利害のないことを説明した。アンケート用紙は無記名とし、個人が特定できないよう配慮した。

3結果

1)対象利用者

17名の内訳は、男性3名(17.6%)、女性14名(82.4%)である。平均年齢は80.5±9.8歳であった。

区分別介護度は、要支援1が4名(23.5%)、要支援2が13名(76.5%)であった。

ADLの項目に関しては15名(88.2%)の人が「している」と回答していた。「していない」と答えた項目については「一人でお風呂に入る」という項目であり、2名がそう回答していた。

一方IADLでは、洗濯・洗濯物たたみを除く家事全般や乗り物に乗る等の7項目に関して、「している」と回答した利用者が減少した。

次に、「してみたい・興味がある」と回答した項目について、趣味・地域活動・社会参加の32項目から、多かった項目上位3位を挙げる。1位が旅行・温泉で11名(64.7%)2位が映画・観劇・演奏会で9名(52.9%)3位が畑仕事、友達とおしゃべりで8名(47%)の順であった。

次に、IADLの項目について、多かった項目上位3位を挙げる。1位が掃除・整理整頓で7名(41.1%)2位が買い物で6名(35.2%)3位が電車・バスでの外出、家や庭の手入れ・世話で5名(29.4%)の順であった。

2)家族介護者

家族介護者は14名(87.5%)がアンケートに回答した。

回答者の性別は、男性4名(28.6%)、女性10名(71.4%)であった。

年齢は40歳代が1名(7%)、50歳代が7名(50%)、60歳代が4名(29%)、70歳代が2名(14%)であった。

家族が「してほしい」と回答した項目について、多かった項目上位3位を挙げる。

1位が散歩で10名(71.4%)2位が体操・運動で9名(64.2%)3位が友達とおしゃべり、お茶・お花、音楽を聴く・楽器演奏、絵を描くで8名(57.1%)の順であった。

次に「してほしくない」と思っている生活行為について多かった項目上位3位を挙げる。

1位が賃金を伴う仕事で8名(57.1%)2位が自転車・将棋・麻雀・ゲームで7名(50%)3位が料理を作る、デート・異性との交流で6名(42.8%)の順であった。

4考察

当施設の通所リハ利用者において、ADLは自立しているが電車・バスでの外出や料理を作ること、買い物に行くなどのIADLが少ない状況にあった。

また、家事全般や買い物、趣味・地域活動に関しては「してみたい・興味がある」と回答していることから、身体機能面のアプローチだけでなく、地域活動や参加を促すアプローチも必要だと考えられる。

また、利用者の聞き取り調査で、「してみたい・興味がある」活動でもその場まで、自宅から歩いて行ける距離でないため、参加することができないといった声が聞かれた。利用者にとって移動手段の確保の難しさが自律の阻害要因となっていることが考えられる。

一方で家族が「してほしくない」と思っている生活行為では、料理が挙げられたが、高齢者の場合、家庭内の役割交代や障害を有した場合に、危険や不安を案じる家族の反対により役割が喪失するといった課題が挙げられる。土井は、家庭内で一度役割を喪失してしまった高齢者が、家事などを行ううえで重要なことは、動作や活動の自立ではなく、家庭や施設など所属する集団で、その行為が役割として定着し、期待されることであると述べている。

このことから、1本人の生活状況やニーズを把握する2家族の理解を得ながら本人の出来る役割を見出し見守る3通所リハにおいて、家族が危険や不安に感じている利用者のIADLの訓練を行い、家族が安心できるようにするといった関わりが必要であると考

える。

5おわりに

通所リハ利用者が、安心して役割や地域の活動に足を運ぶことが出来るよう、今後は本人を取り巻く多職種や家族と連携し、本人の興味のある活動や役割を引き出していきたい。

また、地域資源情報や移動手段（認知症カフェや安価で乗ることができるタクシーなど）について、家族や本人へ伝えるといったコミュニケーションが必要であると思われる。